宇宙生命哲学 ことはじめ

68

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

宇宙船地球号の五輪開会式

第33回夏季五輪が、「広く開かれた大会」をスローガンにパリで開催されている。アスリートの熱気で、正に「パリは燃えている」。日本選手の活躍も目覚ましい。今回は、夏季の五輪史上初めて、スタジアム内ではなく、セーヌ川とその川沿いに佇む歴史的建造物・史跡・公園・広場など、パリの街全体を会場として開会式が行われた。世界各地で、テロ・暴力・戦争が蔓延しているにもかかわらず、無防備な環境で五輪の開会式を挙行する主催者側の真の意図は何処にあったのだろうか。

川といえば水、水といえば生命、地球は水の惑星、水は生命の源であり、正に地球生命38億年の歴史を彷彿させる。地球上での文明の発祥が全て大河のほとりであることに思いを馳せて、地球は一つの大きな環境生命体（宇宙船地球号）だということを自然に脳裏に刻むことができた。セーヌ川は、パリの南東部ブルゴーニュ・フランシュ・コンテ圏に水源を発し、フランス北部を西へ流れ、パリを通ってセーヌ湾に注ぐ全長約780キロの川である。セーヌ川の周辺に世界のアスリートが集い、熱戦を繰り広げ、80億の人類がその熱狂を、地球規模のネットワークで共有しているとしたら、何と平和な惑星の姿だろうか。

7月26日のセーヌ川は、徐々に雨足の強くなる生憎の天候であったが、206の国と地域から参加した6800人のアスリートが、85隻の船に分乗して6キロ余りの川面を航行し、観客は両岸に設けられた観客席やバルコニーからセレモニーを楽しんだ。歴史的な名所が舞台となり、パフォーマンスが繰り広げられ、随所にフランスの歴史も刻み込まれていた。式典の終盤で、エッフェル塔の2階で熱唱されたセリーヌ・ディオンの「愛の讃歌」は感動的であった。小船の上で炎に包まれたグランドピアノに寄り添い、ジュリエット・アルマネが歌う「イマジン」には、地球の現状と照らし合わせ大きなメッセージが込められていた。「イマジン」は、東京五輪2021でも、北京冬季五輪2022でも歌われた。今後の五輪でも、「イマジン」が歌い継がれるとのアナウスがあった。セーヌ川という、フランスのシンボリックな舞台を世界に開放したフランス国民の勇気と誇りに心からの賛辞を送りたい。8月28日から始まるパラリンピックにも期待が持たれる。そして、各地で続く悲惨な戦争が、一刻も早く終息することを願うものである。

パリ五輪の各メダル（Paris2024公式写真）